

日本語

No. 1 塩釜神社跡

307字

白老に元陣屋を築いて警備にあたった仙台藩士たちは、陣屋を見下ろす東西の小高い丘に国元から2つの神社を分霊して陣屋の守りとしました。

東側の丘には、仙台城下の総鎮守^{あたご}愛宕神社を、そして西側のこの丘には、海上の安全を守護し武徳神を祀る奥州一之宮 塩釜神社を建立しました。両神社はともに安政3年（1856年）の元陣屋構築と同時に建立され、国元に準じて祭典が行われるなど、遠く故郷を離れた藩士の心の拠り所となっていました。

現在の社は、昭和29年（1954年）の台風で倒れた陣屋の赤松を用いて改築されたもので、赤松は藩士が仙台から運んだ苗木が大きく育ったものです。毎年8月10日には、地域住民により例大祭が挙行されています。

No. 2 ^{うちくるわ}内曲輪

283字

白老元陣屋は、「長沼流」という兵法に則り、円及び弧状の土塁と堀を築き、^{うちくるわ}内曲輪と^{そとくるわ}外曲輪とに大きく分けて築城されました。また、土塁の上にはぐるりと高い柵を巡らせました。

内曲輪は、直径125mほどのやや歪んだ円状の土塁と堀に囲まれており、堀に架けられた太鼓橋で外曲輪と結ばれていました。土塁の高さは約2mで、入口部分は3mと高くなっています。内部には本陣・^{かんじょうしょ}勘定所・^{こくぐら}穀蔵・^{ひょうぐこ}兵具庫・^{うまや}厩などが建てられ、井戸も掘られていました。外曲輪が居住的な性格を持つのに対し、内曲輪は管理的な機能を集中させていたことが分かっています。

No. 3 そとくるわ 外曲輪

356字

外曲輪は、東は土塁と堀、西は蛇行する小河川によって囲まれ、土塁の高さは約3mで、入口から内曲輪^{うちくるわ}までは210mもの土塁が築られました。

入口は土塁を円弧状に築き、虎口^{こぐち}と呼ばれる土塁を設けて陣屋内を直接覗き込めないよう工夫しています。内部には、二番から五番までの番号が付けられた長屋と稽古場^{こぐち}が建てられていました。稽古場には4本の馬場^{ばば}、的場^{まとば}が並行して配置されていました。

内曲輪の施設も含め、建物跡などは発掘調査が行われ、位置や規模などを確認したうえで復元されています。平面的に復元する方法をとり、建物の間取りなどを現在に伝えています。

また、藩士たちが故郷の風景を白老に再現するため、仙台から苗木で運んだ北海道最古級、樹齢160年の赤松が、歴史の生き証人として元陣屋の移り変わりを見つめています。

No. 4 史跡白老仙台藩陣屋跡

291字

幕末の北海道の姿を克明に伝える白老仙台藩陣屋跡は、テーマ博物館仙台藩白老元陣屋資料館とともに、国指定の史跡公園として広く公開されています。

白老町では、2020年4月のアイヌ文化復興のナショナルセンター 民族共生象徴空間「ウポポイ」の開設を機に陣屋跡のさらなる活用を促すため、人道橋の改修や多言語ガイダンスシステムの導入など、外国人観光客も視野に入れた利用者の利便性を高める取組を進めています。

また、来場者が史跡に対する理解や愛着を深めるためのイベントや展示会などの博物館活動を積極的に開催するほか、利用者に対し、おもてなしの心をもってご案内するガイド人材の養成も継続的に行っています。

No. 5 藩士墓地

298字

仙台藩による白老を拠点とした警衛期間中12年間における藩関係者の死没者は男19名、女4名の合計23名に達しました。戦争による死者はいませんが、厳しい冬の寒さや野菜不足による脚気がその原因だったようです。

当墓地を含めた陣屋の跡地は、明治維新後しばらく住民の記憶からも消えていましたが、明治39年(1906年)、雑草の中に倒れていた藩士の墓石が発見されたことから、付近住民が「青葉会」を結成し、藩士供養や塩釜神社の立て直し、例大祭の挙行に力を注いできました。

現存する墓石は11基あり、毎年8月10日に慰霊祭が行われています。また、社台には、陣屋を守り自刃した代官草刈運太郎の墓も祀られています。

No. 6 仙台藩元陣屋のご紹介

371字

江戸時代の末期、北方の警備のため構築された白老仙台藩元陣屋は、警備にあっていた仙台藩士たちがこの地を去り、歴史の表舞台から消えてから、すでに160年の歳月を数えています。

しかし、自然の地形を巧みに取り入れて広大な敷地に造られた元陣屋は、道内最大の規模を誇り、また、函館の五稜郭とともに幕末の蝦夷地の様子を伝える遺構として歴史的にも学術的にも価値が高く、昭和41年(1966年)に国の史跡として指定を受けました。

当資料館は町制施行30周年を記念して、北方警備と本町の基礎を築いた仙台藩の業績を広く世に紹介するため、昭和59年(1984年)に開館しました。また、陣屋跡は史跡公園として広く一般に公開され、空気が澄み緑の映える夏はもとより、春の桜や秋の紅葉の時期には、道内外から多くの観光客が訪れるなど、生涯学習や憩いの場として利用されています。

No. 7 蝦夷地への視察

422字

アメリカ・ペリーの来航の2年後にあたる安政2年（1855年）、幕府は東北地方の5つの藩と松前藩に蝦夷地の分割警備を命じました。仙台藩では三好監物、みよしけんもつ うじいえひでのしん氏家秀之進らを送り込み、蝦夷地の調査をさせました。

当初、幕府は交通の要所として栄えていた苦小牧の勇払に、北方警備の拠点となる元陣屋を築くように指示しましたが、監物らは、三方を山に囲まれ、東西を小さな河川に挟まれた天然の要害の地で、しかも函館からの距離が近い、白老ウトカンベツの地が最適であると報告し、幕府からの許可を得ました。

安政4年（1857年）6月に完成した元陣屋は、道内に24ヶ所設けられた陣屋の中でも最大の規模を誇りました。また、白老より東に位置する広尾、厚岸、根室、くなしりとう国後島のトマリ、えとろふとう択捉島のフウレベツには、でばりじんや出張陣屋という小さな砦を築くことで対応しました。

白老の元陣屋は、防衛上の拠点として大きな役割を担っていたのです。

No. 8 北方の脅威強まる

341字

ロシアは17世紀ごろから次第にアジアへの進出を強め、カムチャッカを領有しました。その後、18世紀には千島列島沿いに南下を始め、日本近海にもたびたび貿易船が接近するようになりました。

安永7年（1778年）、道東の霧多布きりたつぷにロシア人が上陸し、幕府に対して通商を求めました。こうした情勢に、幕府は蝦夷地を防衛することの重要性を強く認識するようになりました。

長崎で学び、世界情勢をよく知る仙台藩の工藤平助くどうへいすけや林子平はやししへいらは、いち早く世界に目を向けた人物として知られています。彼らはロシアの南下や外圧を警告するための書物を記し、他国からの侵略に対し警笛けいてきを鳴らしました。しかし、彼らの願いは受け入れられず、幕府は人心を惑わすものとして、逆に彼らを罰しました。

寛政4年（1792年）、ロシア使節ラクスマンが根室から函館を経て、当時の蝦夷地の首都である松前に来航して通商を求めました。さらにイギリス船も姿を見せるようになったことから、北方の問題は次第に世間の注目を集めることとなりました。

蝦夷地の警備は、もともと松前藩の任務でしたが、未知で広大な土地であり、財政力も乏しく兵力も不足していたため、幕府や他藩からの支援が必要な状況でした。そのような事態に危機感を強く抱いた幕府では、蝦夷地の情報を得るための調査を行い、警備の強化に乗り出しました。

寛政11年（1799年）に幕府の直轄地（第1次幕領期）^{ちよっかつち}となってからは、各地に幕府の役人が置かれ、松前藩が統治する頃とは比較にならないほどの資本が投入されて、行政権が蝦夷地全域に広がっていきました。また、同時に各藩によって陣屋も設置されたことから、防衛力も向上しました。

19世紀初頭、ロシアの南下政策が落ち着いたことから、蝦夷地は松前藩の領地に戻されました。しかし、中期になって再び緊迫し、各国の通商要求も強まりました。

幕府は安政元年（1854年）にアメリカと日米和親条約を結び、函館と静岡県の下田の2つの港を開港することとなり、200数十年に及んだ鎖国政策に終止符が打たれました。翌年、締結したロシアとの条約では、日本とロシアの国境が択捉島とウルップ島との間に定められ、樺太は両国の雑居地となりました。

北方警備の必要性を痛感していた幕府では、松前藩の居城付近を除いた蝦夷地を再び直轄して警備を強化していきました。幕府の命令を受けた仙台藩では、三好監物らを蝦夷地に派遣し巡察させました。

こうして、仙台藩による蝦夷地出兵、北方での警備が始まったのです。

No.10 藩士たちの出兵

358字

安政3年（1856年）5月、蝦夷地警備の第一陣として約220名が仙台城下を出発しました。氏家秀之進^{うじいえひでのしん}を最高責任者の御備頭^{おそなえがしら}とする一行には、藩士のほかに藩内各地から集められた下級の武士に加え、医師や大工の姿もありました。出発に必要な費用は、派遣された各人が負担することとなり、支度金の工面に苦勞する者も多くいたようです。

白老までの移動日数は、順調にいけば20日程度でしたが、津軽海峡の渡海のための青森での船待ちや風雨による滞留などが重なり、2ヵ月を要することもありました。また、仙台藩からの陣屋警衛に対する経費も切り詰められていたため、自給自足を強いられる状況でした。

藩士らによる積極的な開墾も行われましたが、蝦夷地での生活は、アイヌの知恵や支援、労力に頼るところも非常に大きいものでした。

No.11 白老元陣屋の建設

334字

元陣屋の建設は、白老前浜にあった会所と呼ばれる役所を仮住まいにして、御備頭^{おそなえがしら}の氏家秀之進^{うじいえひでのしん}が自ら指揮を執り、急ピッチで行われました。

約1年という極めて短い期間で造られた元陣屋でしたが、深い堀が掘られ、高い土塁が築かれたその中に、藩士が暮らす6棟の長屋を始め、蔵^{うまや}や厩^{うまや}、6基の門などが建てられました。また、国元から塩釜神社^{あたご}や愛宕神社も分霊されて小さな祠^{ほこら}も祀られました。

建設には、仙台藩から同行した大工のほか、白老場所の経営にあっていた商人の場所請負人^{のぐちやまたぞう}野口屋又蔵が手配した者や大勢の地元のアイヌも加わり行われました。このようにして安政4年（1857年）6月18日、落成式が盛大に執り行われました。

白老元陣屋は、三方を山に囲まれ、東西を小河川が流れる天然の要塞のなかに、高い土塁が築かれ、深い堀が掘り込まれた屈強な陣構えでした。その規模は次のとおりです。

白老浜から北東に約2 kmに位置し、面積は66,000㎡。内曲輪うちくるわと呼ばれる本丸の直径は125 m。また、外曲輪そとくるわと呼ばれた二ノ丸の長さは216 m、幅は120 mでした。土塁の高さは2～3 mで、その延長は835 mもありました。秣場まぐさばを含む総面積は1,237,500㎡という広大な広さを誇りました。

堀の周辺では、当時の藩士たちも目にした天然のヘイケボタルを今も見ることができます。

200年以上続いた泰平の世に慣れた武士たちの綱紀^{こうき}を引き締め、武士の気風を鼓舞することは、陣屋の運営を進める上で最も重要なことでした。

兵学を学ぶ講義や武芸の稽古をはじめとして、火縄銃^{おおづつ}や大筒の撃ち方訓練、さらには、完全武装をして行う実践的な訓練「修羅前^{しゅらまえ}」などが行われていました。その様子は他藩と比較されることもあり、厳しく行われていたそうです。

武士たちの任期は概ね1年間で、春まだ浅い4月頃に仙台から着任し、翌年、次の勤務者と交代しました。夏の間はともかく、慣れない蝦夷地の厳しい冬の寒さは、武士たちにとって大変辛いものでした。

また、幕府は安政6年（1859年）9月からロシアをはじめとした欧米列強が蝦夷地に進出することを警戒して、防衛上の重要拠点となった蝦夷地を分割して警備するほかに、各藩に警衛もさせることとしました。これにより白老は仙台藩の領地となり、民政を担当する代官も置かれました。

当時の地図を確認すると、広大な蝦夷地を仙台藩のほか、松前・津軽・秋田・南部・庄内・会津の各藩が警備し警衛していたことがわかります。仙台藩では白老を西の端として、広尾、厚岸、根室、遠くは国後島^{くなしりとう}や択捉島^{えとろふとう}にも出張陣屋^{でばりじんや}を置きました。いずれも白老から数百kmも離れた北海道の東端とそれに連なる島々で、当時、東蝦夷地と呼ばれた遠大な地でした。気候風土は白老より一層厳しく、陣屋の建設や日頃の警備に非常に苦労したと伝えられています。

当時の白老は、蝦夷地警備の重要拠点として、仙台藩をはじめ多くの武士や商人らの往来があり活気がありました。しかし、藩士個人とアイヌの交流は、「掟」により厳しく禁止されていました。

万延元年（1860年）春、現地引き継ぎを終え、白老は幕府の直轄地ちよつかつちから仙台藩の領地になりました。初めての民政責任者として相沢儀伝太あいざわぎでんたが代官に就き、白老前浜の会所で仕事にあたりました。仙台藩では、代官は地元のアイヌの人たちと接する重要な役目だと考え、有能な人材を配置しました。

一方、白老場所の経営は場所請負人の野口屋又蔵のぐちやまたぞうが行い、地元民と協力しながら昆布や干したイワシ等の生産にあたりました。野口屋は終生仙台藩のために尽くし、幕末の藩士撤退にも大きな役割を果たしました。

こうしたことから白老では、仙台藩の「掟」に従い、代官や請負人らが当時場所内に約400人いたアイヌとの共生に努めたことから、比較的平和な様相を呈していました。アイヌに対する労いをこめた行事であるオムシャは、漁の終わった初冬に場所内のアイヌを呼び集め、守るべき「掟」を読み聞かせた上で酒宴しゅえんを催したものです。

なお、野口屋又蔵の功績碑が虎杖浜に、4代目代官 草刈運太郎くさかりうんたろうの墓が社台にあり、地元の人たちが手厚く祀っています。

字

慶応4年（1868年）1月、明治新政府が15代将軍徳川慶喜とくがわよしのぶの追討令を出したことから戊辰戦争と呼ばれる国内を二分する内戦が起こり、仙台藩には新政府側から幕府方会津藩への討伐命令が下されました。藩内の議論は二分しましたが、仙台藩は奥州列藩同盟を結んで幕府軍として新政府軍と戦うこととなり、戦火は東北地方へ波及しました。

幕府側として戦った仙台藩の戦局が不利になったことで、新政府軍からの厳しい追及が白老元陣屋にも寄せられるようになりました。函館の野口屋から追討軍が白老へ派遣されたことを伝え聞いた御備頭おそなえがしら 児玉覚之進こだまかくのしんは、本藩へ戻って軍を立て直すため、その日のうちに陣屋から撤退しました。

代官の草刈運太郎は、仙台藩士が去った後も民政責任者として白老に残り、陣屋とこの地を守ろうとしました。しかし、押し寄せた新政府軍により負傷し、社台の浜で故郷仙台の方角を向き、切腹による最期を遂げました。

一方、元陣屋の建設地を白老に見出し、自らも2代目御備頭として赴任した三好監物は、仙台藩主を支える有能な人物でした。幕末の探検家として知られる松浦武四郎とも交友があり、詩歌や絵画にも秀でた文化人でもありました。

戊辰戦争では新政府への恭順と会津征伐を主張し、藩内の幕府方と対立、53歳で自刃し、武士としての最期を遂げました。彼の死後、政府は「勤王の大義を固く守った忠義の士」として、遺族に対し祭祀料さいしりょう200両を賜りました。

監物の故郷、岩手県南部の一関市藤沢町には、監物の功績を讃える大きな碑が立っています。